

書陵部藏南宋版『春秋経伝集解』の原装と蔵書印について

櫛 筥 節 男

はじめに

近年、太田晶二郎氏は『金沢文庫「正印第三類第八号印」は古印ではなからう』と題した論文を著わされた。⁽¹⁾ その要旨は、山城喜憲氏が『知見孔子家語諸本提要』⁽²⁾ において尊経閣文庫蔵『孔子家語』は朝鮮明宗代刊（一五四六〜一五六六年）の覆刻整版であるということを明らかにされたことに拠り、同書および同文庫蔵南宋版『春秋左氏音義』・宮内庁書陵部蔵南宋版『春秋経伝集解附経伝識異』に捺されている金沢文庫印（正印第三類八号印）⁽³⁾ は「鎌倉時代まで上るような古印ではない」と論断された。

殊に『春秋経伝集解附経伝識異』（以下『春秋経伝集解』と略称）について、この書に捺されている中国明代中期の文人、祝氏の印記と金沢文庫印の関係から「もし祝氏の印が正しければ、此の金沢文庫印はそれを遡らない」とされ、次いで『重訂御書籍来歴史』に記されている近藤守重

の祝氏印・金沢文庫印の両印贋造説を掲げ「古く金沢文庫印を捺された宋板本が、何らかの事情で漢土に戻って、明の祝允明の蔵書になり、そののち、あらためて又日本に渡来する、といふことも、考へ得るものであるが、（例えば、正平版『論語』の写本が、韓半島を経て、漢土に渡り、それが戻って、今又、我が国の静嘉堂文庫に存すやうに、）実際の可能性はごく低いであらう」とされ、「いづれにしても、允明の印と共存することでも亦、金沢文庫三類・八号印は臭いものになる」との意見を述べられている。

氏の論文に触発され当部蔵『春秋経伝集解』を調査したところ、装幀と蔵書印の関係などからいくつかの興味ある問題が提起された。そこで本稿はこの調査の結果を報告するものである。

(一)

『春秋経伝集解』の現在の冊数と巻立は十五冊三十巻で、巻末に列銜・

刊記・経伝識異を載せる。書誌を概説すると、袋綴、縦二十七・五糧、横十九糧、每半葉八行、注文双行、每行本文注ともに十七字、白口、刻者名がある。左右双辺、匡郭内、縦二十二・五糧、横十五糧、宋諱の欠筆がある。本書のうち卷三・四・二十・二十一・二十六から二十八の七巻は補写となっている。

さて、十五冊の印記は金沢文庫印の他、十種の蔵書印が捺されている⁽⁵⁾。このうち第一冊首に捺されている佐伯藩主毛利高標の印記などから、本書は佐伯藩主第十代毛利高翰が文政十一年(一八二八)⁽⁶⁾に江戸幕府に献上したものであり、更にその後秘閣図書となり、明治二十四年図書寮に引き継がれたことが分かる。卷末の刊記によれば、本書は興国軍学教授聞人模が嘉定九年(一二一六)に軍学において刊行した五経本の一つである。元来この書は鄭仲熊が紹興二十二年(一一五二)に刊行したものであるが、長い年月を経たため字画が摩滅し、且つ「春秋」の一経を欠くに至った。そこで軍学教授聞人模が葉凱、沈景淵らの協力のもとに「春秋」を加え、監本および諸路本で校勘し、諸家の字説を参考にして文字の誤を訂正し、経伝識異を附して刊行したものである⁽⁷⁾。

書陵部編『図書寮典籍解題』によれば、本書は我が国に伝来して金沢文庫に入ったものであり、補写部分は我が国人によって慶長・元和の間に補写されたと伝えられる⁽⁸⁾。

各冊の所収巻次、即ち冊立と巻立の関係を掲げると次の通りである。

〔A表〕(卷三・四・二十・二十一・二十六から二十八は補写)

第一冊	序・卷一・二	第九冊	卷十九
第二冊	卷三・四・五	第十冊	卷二十・二十一
第三冊	卷六・七	第十一冊	卷二十二・二十三
第四冊	卷八・九・十	第十二冊	卷二十四・二十五
第五冊	卷十一・十二	第十三冊	卷二十六・二十七・二十八
第六冊	卷十三・十四	第十四冊	卷二十九
第七冊	卷十五・十六	第十五冊	卷三十
第八冊	卷十七・十八		

またA表における金沢文庫印の位置を示すと次表の通りとなる⁽⁹⁾。

〔B表〕(首は巻頭、尾は巻末の金沢文庫印の位置を示す。補写の巻には捺されていない)

第一冊	序首・卷二尾	第九冊	卷十九首・尾
第二冊	卷五首	第十冊	無
第三冊	卷六尾・七首	第十一冊	卷二十二首・二十三尾
第四冊	卷八尾・九首・十尾	第十二冊	卷二十四首・二十五尾
第五冊	卷十一首・十二尾	第十三冊	無
第六冊	卷十三首・十四尾	第十四冊	卷二十九首・尾
第七冊	卷十五首・十六尾	第十五冊	卷三十首・尾
第八冊	卷十七首・十八尾		

さて、A・B表によって冊立と金沢文庫印の位置を見ていくと、第一

冊および第五冊から第十五冊までは正しく首尾に捺されているのに対し、第二・第三・第四冊は明らかにその位置に混乱が認められる。そこでこの混乱を正すため第二・第三・第四冊の巻の金沢文庫印の位置を首尾に来るように巻立を改めてみると、巻五と巻六で一冊、巻七と巻八で一冊、巻九と巻十で一冊となる。

これに従って、冊・巻立の関係を再編すると次の表となる。補写の問題があるが、これが金沢文庫印が捺された当時の冊・巻立であり、現状はそれが後に改装されたものと推定されるのである。

〔C表〕(首・尾はB表と同様、金沢文庫印の位置を示す。第二・十一・十四冊は補写)

第一冊	序首・巻一・二尾	第九冊	巻十七首・十八尾
第二冊	巻三・巻四	第十冊	巻十九首・尾
第三冊	巻五首・六尾	第十一冊	巻二十・二十一
第四冊	巻七首・八尾	第十二冊	巻二十二首・二十三尾
第五冊	巻九首・十尾	第十三冊	巻二十四首・二十五尾
第六冊	巻十一首・十二尾	第十四冊	巻二十六・二十七・二十八
第七冊	巻十三首・十四尾	第十五冊	巻二十九首・尾
第八冊	巻十五首・十六尾	第十六冊	巻三十首・尾

以上の推定に基づいて、今度は現時点でも確認できる糊の痕跡の面から、この推定が矛盾なく裏付けられるかどうか考えてみたい。

各巻各張の版心の裏の部分に、平均して幅二耗ほどの茶色の痕跡が残っているのが注目され、とりわけ巻首・巻尾の中には約五耗と幅の広い痕跡が見られる。このような痕跡は、当部で所蔵する宋版本のうち、裏打をしていない虫損部分に限って修理をした宋版『東坡集』(函架番号四〇四・五九)『論衡』(同五〇〇・八)などにも残っている。

後述するように、この痕跡は紛れもなくかつての糊跡であり、これら宋版本の原装が、この部分を糊で貼り合せた粘葉装であり、加えて巻首・巻尾に残る糊跡も、ここに元表紙がついていたものと考えられる。

従って巻首・巻尾に残る幅の広い糊跡が完全に残っていれば原装即ち、粘葉装の時点に復元できることになる。

各巻首・巻尾の糊跡の幅を一表にして見ると次の通りである。

〔D表〕(表の○印は約五耗、×印は約二耗の糊跡の幅を示す。また空欄は修理のために糊跡が判然としないところ。なお補写本は除いた)

巻	首	尾	巻	首	尾
19	×	○	1		
22	○	×	2		
23	×		5	○	×
24	○	×	6	×	○
25	×	○	7	×	○
29	×	○	8	×	○
30	×	○	9	×	○
			10	×	
			11		
			12	×	
			13	○	×
			14	×	○
			15	×	○
			16	○	×
			17	×	○
			18	×	×

現状では第二冊の末は巻五で、この巻尾版心裏に残る糊跡の幅は二耗、第三冊の初は巻六で、この巻首版心裏に残る糊跡の幅も約二耗であることから両巻はもと合綴であったと考えられる。一方、巻五首版心裏および巻六尾版心裏に残る約五耗の幅広の糊跡は、ここに表紙がつけられていたことを示している。

さらに虫損などの合致からこのことを裏付けすることができる。即ち、各巻の首尾に残る虫損を調べ、ある巻の尾と次の巻の首の虫損が形と大きさに於いて完全に一致すれば、その両巻はある時点で合綴されていたと判断されるのは当然であろう。

右の観点から検討してみると、注目される一例がある。それは巻五尾の左辺欄上に、下辺欄から五厘のところにある虫孔と、巻六首の右辺欄上の、同じく下辺欄から五厘のところにある虫孔の形と大きさが、全く一致することである。また巻五尾版心上部および書脳部分に見られる水による汚損の跡も、巻六首と合致するのである。これを偶然の一致と退けることはできない。

右の一例は、現状では第二冊と第三冊に分離されてしまった巻五と巻六が、ある時期、合綴されていたことの証左であり、従ってその時期に首尾、即ち巻五首、巻六尾に金沢文庫印が捺されたことを裏付けられるものといえよう。

またD表によって分明になる原装から推定される冊立と、B表の金沢文庫印の位置を関連させると次の通りとなる。



巻五首版心裏の幅広の糊跡（濃い色の部分）

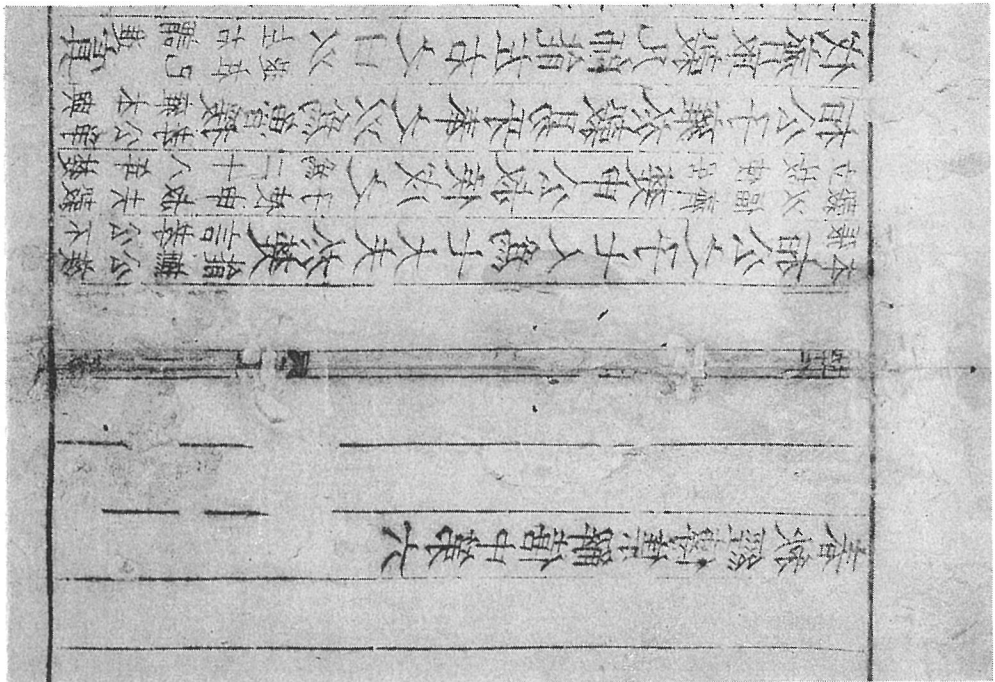
言創星六齡遊乘學矣時風沙而致乘風高
創十六年春創立子宋正創至沙兼星刻可
子新志謝詩

會無子宋六東君前六禮學格思張君曹昌
無殊十日田公秋以平創冬十百二月公

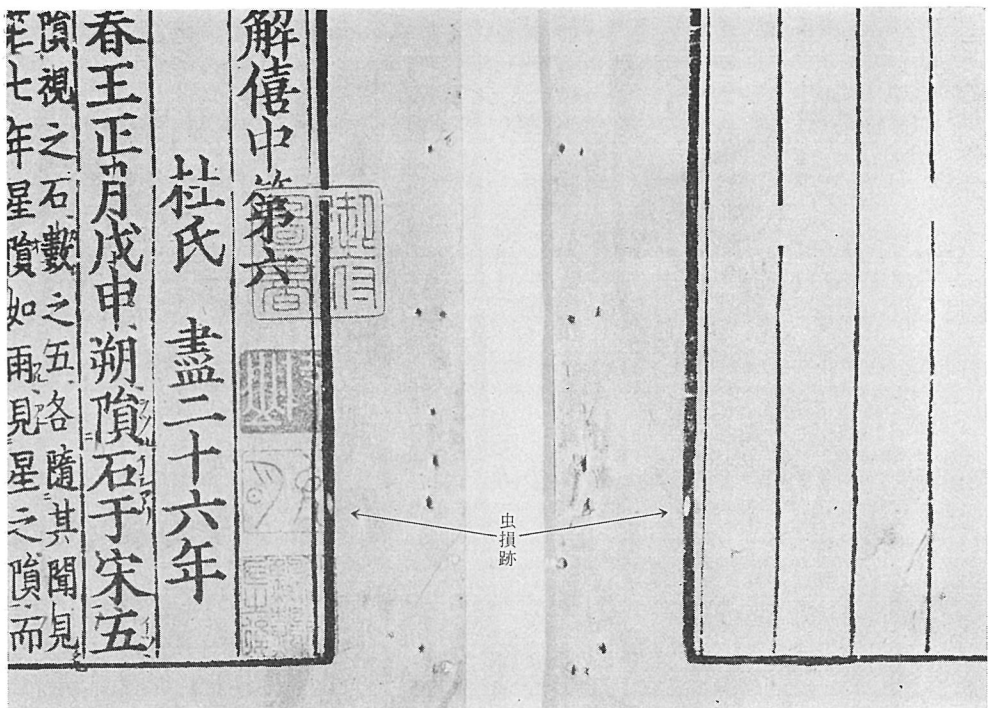
卒公晚小歲書日無南轉晉賈夏四月師增卒
高拜豐風而舉人以二月壬申冬十季文

景月六齡遊乘學矣時風沙而致乘風高
五帳之鏡而不見創之星史各發言而書
望外四數昔仙菩水不見亦故之變其帳見
表影而暗之華子卒星創坡兩泉星三創而
與茲也開其館既之丘墟之丘各觀其闢長

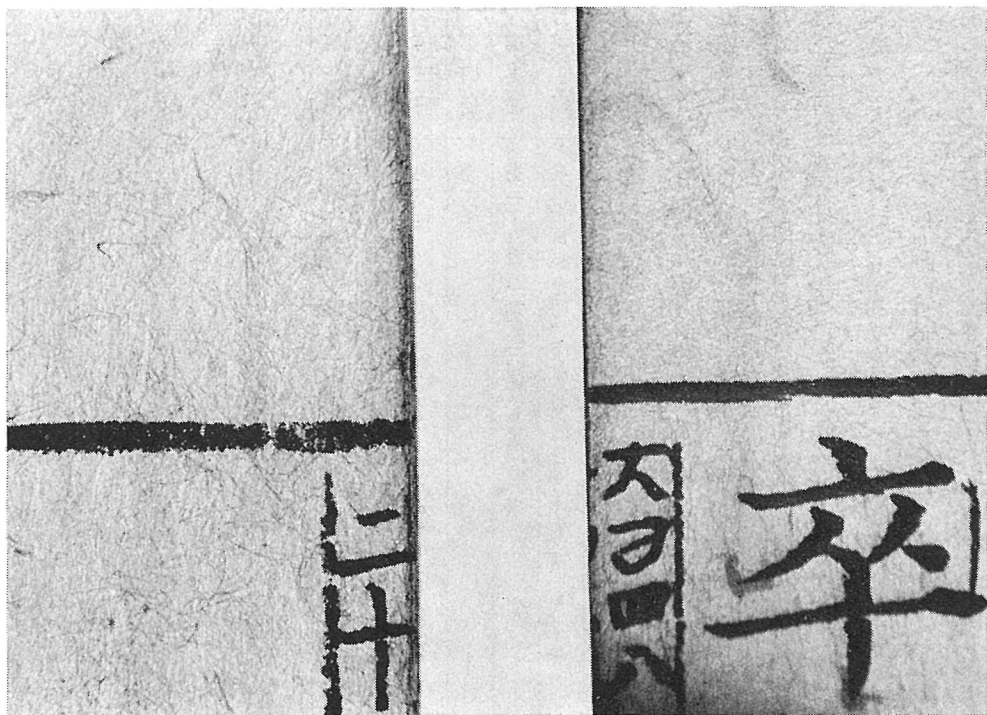
春殊遊學矣未補學必宮正



卷六尾版心裏の幅広の糊跡（濃い色の部分）



卷五尾と卷六首の虫損跡



卷五尾（左）と卷六首（右）の水による汚損の跡

〔E表〕（但し序首・卷二尾・十一首・十二尾・二十三尾の糊跡は不明）

ア	序首・卷二尾	キ	卷十五首・十六尾
イ	卷五首・六尾	ク	卷十七首・十八尾・十九首尾
ウ	卷七首・八尾	ケ	卷二十二首・二十三尾
エ	卷九首・十尾	コ	卷二十四首・二十五尾
オ	卷十二首・十二尾	サ	卷二十九首尾・三十首尾
カ	卷十三首・十四尾		

上表によって原装と金沢文庫印の位置を見ると、「ク」と「サ」の位置以外は原装粘葉装の冊立の首尾に金沢文庫印が捺されていることが判明する。

一方、問題として残る「ク」の卷十七・十八・十九の三巻一冊と、「サ」の卷二十九・三十の二巻一冊の金沢文庫印の位置は、これこそ原装が改装され分冊された後に金沢文庫印が捺されたことを示す証左であると考えられる。このことについては第四章で触れることとする。

また以上のように原装に復元すると、概ね各冊二巻宛となっているが、「ク」は三巻で一冊となっている。これは書陵藏宋版『諸病源候論』の原装復元の場合を見ても分かる通り、一冊に二巻のものもあれば、六巻あるいは七巻のものもあり、なんら不自然でない。（関靖著『金沢文庫の研究』五五六～五五八頁参照）

(三)

次に祝氏の印記「枝山」「允明」印と「金沢文庫」印の位置関係について言及しておきたい。

〔F表〕「枝山」と「允明」印の捺印位置を示すと次の通りである

第一冊	序首（允明）印なし） 卷一首・卷二尾
第二冊	卷五首（允明）印なし）
第三冊	卷六首
第四冊	卷十尾
第十四冊	卷二十九首（允明）印なし） 同巻尾
第十五冊	卷三十首（允明）印なし） 同巻尾

上表によって明らかのように、祝氏の印記は金沢文庫印に比較して少なく、第二・三・四冊の首尾に混乱があるが、全て各冊の首あるいは尾に捺されている。⁽¹⁰⁾

このうち第一冊序首および卷二十九首にある「枝山」印は、金沢文庫印の上に重ねて捺されており、これは金沢文庫印が先に捺され、祝氏の印記はその後に捺された証拠となろう（口絵拡大写真参照）。

また上述のように旧装の粘葉装では巻五と巻六は合綴されており、もしこの時点で祝氏の印記が捺されたとなると、この冊に限り冊中間とな

る巻六の首にわざわざ印記を捺したことになる。これは他の祝氏の印記の位置からみて不自然である。（第一冊の場合、序首および巻一首に祝氏の印記が捺されているが、これは例へば書陵部蔵宋版『呂氏家塾詩詩記』〔函号四〇一一九〕に捺されている「普門院」の蔵書印が、同じく序首および巻一首に捺されているように、両所に蔵書印が捺される例は多く見られる。）

したがって巻五と巻六が合綴されていた時点で首尾に金沢文庫印が捺され、その後両巻は分冊改装され、その後に祝氏の印記がそれぞれの巻の首に捺されたと見る方が当然妥当であろう。

ところで本章の主旨と少々離れるが、ここで祝氏の印記が捺された年代について推考しておこう。

このことについて着目されるのが「淡海鶴鶴氏之後」（以下「淡海」と略称）の印記である。上述したように、この印記は現装の全冊の首に捺されている。従って「淡海」の印記が捺された年代が分かれば、現装の冊立・巻立に改綴された年代を推定することができる。

今のところ「淡海」の印記について明確にすることは出来ないが、本書は佐伯藩主毛利高標（一七五五～一八〇一年）の旧蔵書であり、後に多くの善本稀書と共に江戸幕府に献納されたうちの一本である。現在、書陵部にはこれら献納本の中でも殊に貴重な宋・元版などが所蔵されているが、管見によればこの中に「淡海」の印記が捺されているのは本書に限られている。⁽¹²⁾ このことは毛利高標の蔵書となる以前に「淡海」の印

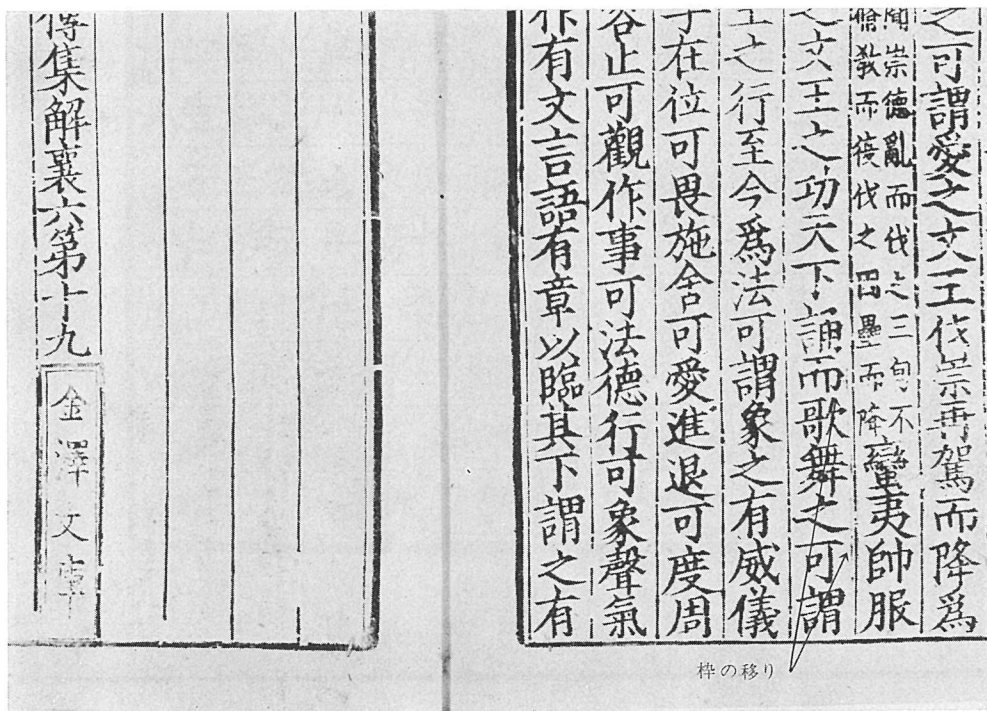
記が捺されたことを示唆⁽¹³⁾している。つまり本書の冊立・巻立の現状は、大まかであるが高標の時代以前、即ち江戸中期以前と考えられる。⁽¹⁴⁾

ところで、巻五と巻六の首に祝氏の印記が捺されていることは、この印記が捺された時点では巻五は一卷で一冊の冊立であり、その後には補写された巻三・四が巻五と合綴され、冊初となった巻三の首に「淡海」の印記が捺されたと考えられる。そしてこの冊立・巻立が現装でもある。従って祝氏の印記が捺されたのは、現装の冊立・巻立に改綴される以前であり、その年代の下限は江戸中期以前と見ることが出来る。

(四)

現装は改装されており、原装粘葉装と金沢文庫印、さらに「枝山」「允明」印の捺印状況に微妙なずれがあることが明らかになったと思うが、それでは本書に金沢文庫印が捺されたのは何時であろうか。年代的には明確には出来ないが、本書に捺されている金沢文庫印が鏡移りとなっている個所があるところから、粘葉装から袋綴に改装後であることは分かる。⁽¹⁵⁾

即ち、巻十四尾題下(三十七張前半葉)に捺されている金沢文庫印の枠の一部が、前の張三十六張後半葉に、また巻十八尾題下の金沢文庫印のうち「文庫」の文字の一部が、前の張の後半葉に、そして巻十九尾においても巻十四尾と同様いづれも鏡移りとなって残っている。もしこれが粘葉装の時点で捺されたのであれば、綴じが逆になるので袋綴改装後



卷十九第三十四張裏に移る金沢文庫印の枠の一部

の前葉の対象する位置に鏡移りが見られる筈がない。

これらの鏡移りは、捺印の墨が長年月の経過によって対面に移っているのは、墨色の濃さで明らかに異なるもので、印を捺した後、墨が乾ききらないうちに本を閉じたために移ったものであることは歴然としている。このことから、金沢文庫印が捺されたのは粘葉装から袋綴に改装された後であることが明らかになる。

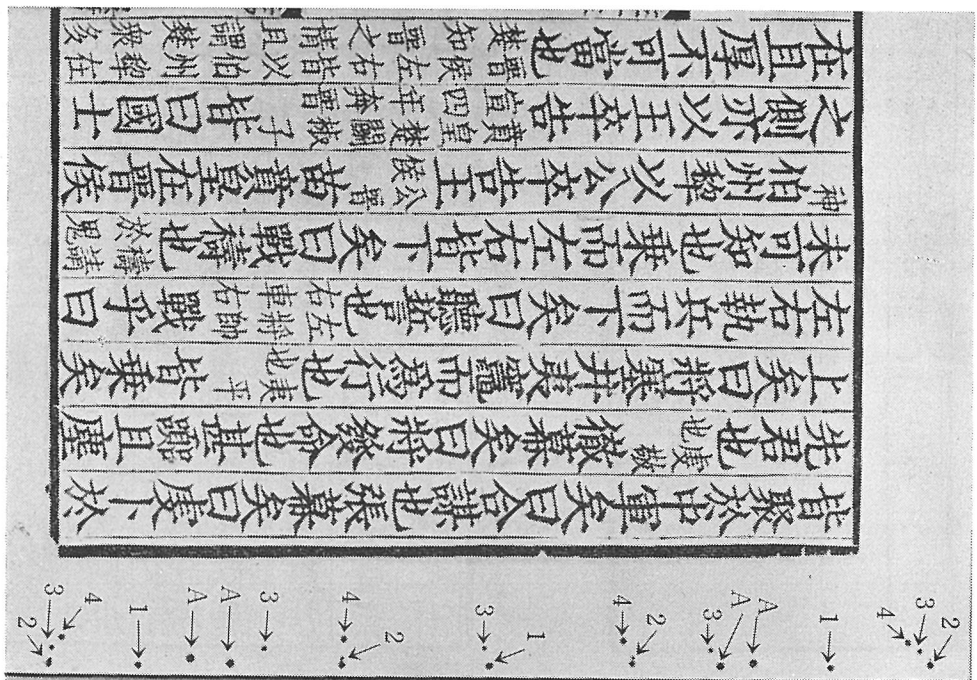
また第二章・E表の原装複元によって明らかになった卷十七・十八・十九の三卷一冊と、卷二十九・三十の二卷一冊に捺されている金沢文庫印の位置に混乱があるのも、このためである。

さらにもうひとつ検討を加えれば、本書の補写部分卷二十・二十一・二十六～二十八は慶長以前、卷三・四は元和以降の補写とされている。これら補写部分の料紙は、卷三・四が竹紙系、卷二十・二十一・二十六～二十八は楮紙であり、両紙の状態を比較すると楮紙の方が古いと思われる。煩雑ではあるが、本書に残る綴じ孔からこの点について見てみたい。

袋綴装幀の図書が、修理された後に再び綴じられる時の綴じ孔は、修理前の元の綴じ孔を使うことが多いが、新たな位置にあげられることもある。この場合、袋綴装幀の図書には新旧二種の綴じ孔の痕跡が残る。

ところで、袋綴（唐本は除く）における綴じ孔の位置は、天と地の両端の綴じ孔の内側の長さを等分にした所とする装幀上の定律がある。

（例へば、袋綴装幀の図書で最も多く見られる四つ目綴じの場合は、両



版本・楮紙・竹紙系に残る綴じ孔の跡（Aは下綴じ・虫は虫孔の跡）
版本（巻13）に残る第1種～第4種

冬十月齊師滅譚譚國在齊南平陵縣西
見滅例在文十五年譚子奔豈國滅無所
出

傳十年春齊師伐我不書伐齊皆公將戰
曹劌讀見曹劌其鄉人曰肉食者謀之又何
間焉肉食在恒者劌曰肉食者鄙未能遠謀
乃入見問何以戰公曰衣食所安弗敢專也
必以分人對曰小惠未徧民弗從也食所惠

尤物足以移人苟非德義則必有禍尤黑叔
向懼不敢取平公強使取之生伯石伯石始
生于宥之母走謁諸姑于宥母取向嫂伯曰
長叔似生男第一弟之妻相謂似姓視之及堂聞其聲
而還曰是豺狼之聲也狼子野心非是莫養
羊舌氏矣遂弗視秋晉韓宣子卒魏獻子為
政魏獻子分祁氏之田以為七縣祁平祁平後
也也分羊舌氏之田以為三縣陽銅平陽銅司馬彌

端の綴じ孔の内側を三等分にした位置。但し厳密に等分するとは限られず多少の違いはある。) この定律によって袋綴に残る綴じ孔の痕跡を検討すると、改綴の回数がかかる場合がある。

本書の竹紙系に補写された巻三・四と楮紙に補写された巻二十・二十一・二十六・二十八と、そして巻一以下の版本に残る綴じ孔の跡を、先の定律によって検討すると次の表の通りである。

〔G表〕(綴じ孔の項に上小口・第一などとあるのは、この間の長さを示す。単位は糎)

種類	綴じ孔				
	上小口	第一	第二	第三	第四
第一種	四・〇	九・六	九・九	四・〇 (第三下小口)	なし
第二種	一・二	八・二	八・三	八・三 (第四下小口)	なし
第三種	一・四	六・〇	六・三	六・三 (第四下小口)	一・五
第四種	一・八	八・〇	七・九	七・九 (第四下小口)	なし

上表の通り本書には、四種の綴じ孔の跡が確認できる。(16) このうち竹紙

系の巻二・三には上表の第三・四種の二種類、また楮紙の巻二十・二十一・二十六・二十八には第二・三・四種の三種類、そして巻一以下の版本には第一種から第四種までの綴じ孔の跡が確認できる。これらのことから分明になるのは、原装から現装まで少なくとも四回の改綴が行われていること、さらに楮紙補写の綴じ孔の跡は、竹紙系補写の綴じ孔の跡より多く、このことは前者が後者より改綴の回数が多いことを示しており、

したがって楮紙補写は竹紙系補写より年代が遡ると云えるであろう。(17)

さらに推考すれば、当初巻三・四は巻二十などと同じ楮紙に補写されていたが、後にこれを失い再び竹紙系の料紙に補写されたものと推定される。

また巻三・四が竹紙系の料紙であること、そして今のところ推測の域を出ないが巻三の首に限り捺されている「牀頭一壺酒能更幾回」(「建芳馨今無門」の印記は、中国人の印記と察せられるところからこの両巻は元来、中国人が所蔵した本から取り合わされたとも考えられる。

(五)

最後に附言として、書陵部が所蔵する宋版本のうち、版心裏に残る糊跡から原装幀が推定されるものについて述べておく。

書陵部所蔵の宋版本は、裏打か虫損箇所のみを繕う(虫損直しと称する)修理が行なわれており、しかも天・地・背共に裁断され原装を残しているものは全く存在しない。しかし上述のように『春秋経伝集解』『太平御覽』『東坡集』『論衡』は、虫損直しで修理されているため、裏打されているものとは異なり、各張版心裏に糊跡が茶色の痕跡として見られるのである。

このうち『太平御覽』第七十冊(巻六三八・六四五)には偶々糸切れがあり、しかも下綴じをしていないので、綴じ直しの際に裏面を殊に詳

細に調査し、糊跡が確認できたのでその結果を報告しておく。

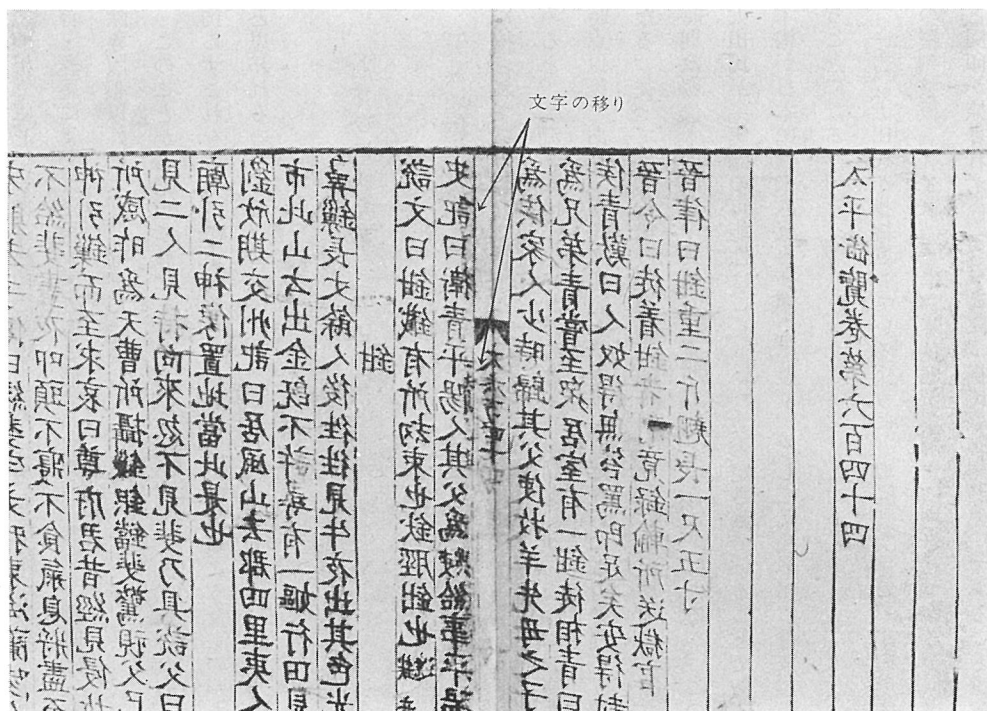
『太平御覧』の現装は袋綴。百十四冊。千巻、目録十五巻。匡郭内、縦二十三・七厘、横十六厘、毎半葉十三行、毎行二十二～二十三字。白口。左右双辺。刻者名がある。

南宋の慶元五年（一一九九）に蜀の地で刊行されたもので、百十四冊のうち、(一)、第五十五・六十四・六十五冊、(二)、第一～二十三・三十八・九十六の二十五冊は補写、(三)の補写部分を除く毎冊の首尾に金沢文庫印（正印第二類第一号・第三類第二・三・五・七号の五種、『金沢文庫の研究』四八四～四九二頁参照）が捺されている。

『図書寮典籍解題』によれば、この書は金沢文庫に伝えられ、その後京都相国寺を経て徳川家康に献進せられたものであり、上掲(一)の補写部分に金沢文庫印があるのは恐らく金沢文庫に入る前、或は金沢文庫架蔵中に補写されたものであり(二)の補写部分は金沢文庫流出後補写されたらしく文庫の印はない。

さて、第七十冊にある糊跡は、冊首の前半葉と冊尾の後半葉の版心裏に約一・五厘、またその他の全張の版心裏にも平均五厘ほどの薄茶色の痕跡となっており、これらの糊跡は所々で太くなっている。この太い糊跡の所に前の張の後半葉第一行にある文字の一部、主に各文字の右半分が移り残っている。

例へば、巻六四四の五張後半葉第一行の「令清」「嶺之雖」の文字の一部分「令」「嶺」が、六張前半葉第十三行裏に移り残り、また



巻六百四十四の六張裏に残る文字の一部

卷六四五の六張後半葉第一行の「高渠彌^{重製}」の文字の一部分「^{重製}」が、七張前半葉第十三行裏に移り残っている。

この他にも多くの文字移りが見られるが、これらのことから本書の原装は、かつて文字面を内側にして、版心中央部から縦に二つに折り、各張の版心裏部分に糊をつけて貼られていた粘葉装で、文字にかけて糊がつけられた所は、改装の際に不注意に剥がされたため、その文字が次の張の裏に移り残ったものと考えられる⁽¹⁸⁾。

また冊首と冊尾の版心裏に限り残る幅の広い糊跡は、ここに表紙が付いていたことを示していると見てよいであろう。

更に例へば、第三十七冊(卷三一九～三三七)のように首の右欄外に捺されている金沢文庫印が、やはり同じ張の左欄外の対象する位置に鏡移りとなっている。同じことがこの冊の尾に見られることから、金沢文庫印が捺されたのは文字を内面して折った装幀、粘葉装の時点であり、そして首尾の版心裏に残る幅の広い糊跡は、これらの張が原装においても一冊の首尾であったことの証拠でもある。

煩瑣になるので詳述しないが、以上のことは『東坡集』『論衡』の場合にも見られ、この二本の原装も粘葉装であったことが明らかになる。

また『春秋経伝集解』も含め『東坡集』『論衡』は、版心の幅が六耗ありこれを中央から縦に二つ折りにして三耗、ここに平均して約二耗の糊跡が残っている(但し巻首・巻尾によつては約五耗の糊跡が残る)。一方、『太平御覧』の版心の幅は一・二糧と広く、これを中央から縦に

二つ折りにして六耗、ここに平均して約五耗の糊跡が残る(本書も巻首・巻尾によつては約一・五糧の糊跡が残る)。しかも糊跡は一部分を除き版心以外の本文部分までは達していない。

このことから宋版における粘葉装の各紙の糊付けは、版心の広・狭に拘らずこれを版心内に止めるという装幀上の定律のようなものがあつたと思われるのである。

むすびにかえて

『春秋経伝集解』を検討した結果得られた書誌的知見に基づき、本書に捺されている金沢文庫印と祝氏の印記について述べてきたが要約してみると、金沢文庫印が捺されたのは本書が粘葉装から袋綴に改装された時点以後であり、祝氏の印記が捺されたのはさらにこの後ということになる。従つてもし祝氏の印記が正印であるなら、金沢文庫印が捺された時期は明代中期以前、我邦室町後期以前ということになるが、この場合太田氏が「実際の可能性はごく低い」と否定されていることであるが、本書が日本に将来され再び漢土に渡り、そして又我が邦に将来したということになる。

一方、太田氏が指摘されているように、尊経閣文庫蔵、李朝明宗代刊の覆刻整板『孔子家語』に『春秋経伝集解』に捺されている金沢文庫印と同印が捺されていることは、祝氏の印記が偽印であることを意味す

る。しかも管見によるところでは、本書に捺されている祝氏の印記と同じものは今のところ存在しない。⁽¹⁹⁾しかし祝氏の印記が例へ偽印であろうとも『春秋経伝集解』に見える金沢文庫印は、本書の現装の冊立・巻立が江戸中期以前まで遡ること、そして現装以前の冊立・巻立の時点で祝氏の印記が捺され、更にこの冊立・巻立以前に金沢文庫印が捺されたこと、また慶長頃と考えられる補写の部分に金沢文庫印が捺されていないことなどから総合的に判断して、金沢文庫印の捺印時期は近世以前であると思われるのである。⁽²⁰⁾

しかしこの場合『孔子家語』に捺されている金沢文庫印との係わりが問題となるが、このことについては今後の課題としたい。

ところで、この宋嘉定九年刊『春秋経伝集解』の現存本は三部を数えるにすぎなく、その稀観なること、そして巻末の「経伝識異」に載せてある他の諸本との校異三十五ヶ条によって、当時における左伝杜注本の異同が分かるなど参考に資すべきものが少なくなく、従って金沢文庫印の捺印時期に拘りなく本書の価値に変わりはないことは言うまでもない。

次に宋版本における原装は、粘葉装であることは周知のことであるが、先述の通り書陵部所蔵の宋版本で原装を残しているものは存在しない。

しかしこれらの諸本の中で版心裏に糊の痕跡が残るものがあり、これが粘葉装の糊跡であることも以前から知られていたことである。この度の検討により、ある張の版心裏に前の張の文字の移りが残っていることが見出だされたことは、このことを裏付けることとなった。

註

(1) 『書誌学月報』第二十三号

(2) 『斯道文庫論集』第二十一輯、山城氏はこの中で韓国国立中央図書館蔵一山文庫本『標題句解孔子家語』三卷二冊、王広謀句解、の刊年について金斗鐘氏の所説、朝鮮明宗朝刊、古活字(乙刻字)本(『韓国古印刷技術史』ソウル探求堂・一九七四)に従うとした上で、「金沢文庫本図録」所掲の書影(本版尊経閣蔵本)と、「韓国古印刷技術史」の書影(乙刻字印本、国立中央図書館蔵一山文庫本)とを比較すれば、本版が乙刻字印本の覆刻整版であることが判明する(幸い、両書影ともに巻下巻頭を掲載)。乙刻字印本刊行後程なくして整版に重刊されたのであらうと論述している。

(3) 関靖氏は、金沢文庫印について正印を三類十二種に区分された。このうち本書に捺されている金沢文庫印は「正印第三類第八号印」(重郭肉細印、縦七・九、横一・九厘)に当たる(『金沢文庫の研究』)。なお尊経閣文庫蔵『孔子家語』(上下・二冊)の金沢文庫印は下冊の首(右下欄外)・尾(尾題の下方)に捺されており、上冊には捺されていない。

(4) 祝允明、字は希哲、長州の人、天順四年(一四六〇)生れ、生れて枝指故に自ら枝山と号す。正統間の進士、山西参政に歴官す。嘉靖五年(一五二六)卒す。『九朝野記』『有前聞記』等を著す。『中國人名大字典』・『支那人名辞典』

(5) 「枝山」「允明」「淡海鶴鶴氏之後」「牀頭一壺酒能更幾回醒」「建芳馨兮廡門」「文炳珍蔵子孫永保」「佐伯矣毛利高標字培松蔵書画之印」「井口氏圖書」「秘閣圖書之章」「御府圖書」、このうち全冊に亘り捺されている印記は「淡海鶴鶴氏之後」「秘閣圖書之章」「御府圖書」の三種で、他七種の印記の捺され方は一律でない。

(6) 献上の年代には、(一)文政十年、(二)文政十一年の二説ある。『内閣文庫圖書分類目録』(内閣文庫編)『日本文庫史の研究』(小野則秋著)などの多くは(一)とする。梅本幸吉氏は『佐伯文庫の研究』第八章・第一節「佐伯文庫より幕府へ献書」の中で「国許佐伯に於ける当時の記録」(書目の所載なし)に拠って「文政十年の十月までに圖書の輸送が行なわれ……その整理が翌文政十一年

六月より着手され、七月十九日整理がついて」と述べ、献上本の江戸到着の年である(二)とする。本稿では一応(一)に従う。

(7) 静嘉堂文庫に本書と同種の『春秋経伝集解』十五冊(巻十・十五から二十、二十三から三十の十五巻)が所蔵されている。長沢規矩也氏は、書陵部所蔵本と比較され「彼此同板の紙葉多く、而も異板の部分は図書寮^(現書陵部)尊蔵本却って補刻なること明なり、故に本書却って真の興国軍学刊本なるを知る」との所見を『長沢規矩也著作集』第三巻「静嘉堂文庫宋刊本展覧会陳列書解説」、また阿部隆一氏も静嘉堂文庫所蔵本は「書陵部本と比較し、同版にしてしかも修補のない早刷本たることが判明する」とし、書陵部所蔵本は「修補が加っているが、原刻の葉は一部に僅にやや摩滅が見られる程度で、全体としてはかなり美しく、修は全面と一部とがあり、修の葉は左程多くはない」と述べている(『斯道文庫論集』第十八輯「日本国見在宋元版本志経部」八四～八五頁)。

(8) 島田翰撰『古文旧書考』巻二に「巻第三・第四元和以後補抄、巻第二十・二十一・二十六・二十七・二十八、五巻係慶長以前補抄」と見える。

(9) 捺印の位置は、首は全て右欄外の下方にあり、巻五と巻三十を除く巻は金沢文庫印の左枠が右双辺に重なる。尾は巻三十を除き全て尾題下、巻三十は冊尾に捺されている。

(10) 書陵部蔵『古芸餘香』(明治時代写、著者不明、尊経閣文庫では「伝伯爵田中光頭輯」と称する)には、「枝山」印は第一・二・三・四・十三・十四・十五冊の七冊に捺されているとしているが、第十三冊に「枝山」印はない。また「允明」印についても第一・三・十四・十五の四冊としているが第四冊にもある。

(11) 「淡海鶴鶴氏之後」の印記については、「鶴鶴」の文字の意味「さぎさぎ」から近江佐々木氏之裔と理解できる。

(12) 今のところ判明する書陵部蔵毛利高標旧蔵本は百六十二部五千七百六十二冊、この百六十二部の第一冊首の全てに高標の蔵書印が捺されている。

(13) 第一冊序の首に捺されている「井口氏圖書」および第十五冊尾に捺されている「文炳珍藏子孫永保」の印記から、これらの印記が江戸中期の漢学者「井

口蘭雪」(名「文炳」、享保四(明和八年)のものであることが判明し、年代の上からこの蔵書印が毛利高標の所蔵となる前に捺されたと解される。このことは「秘閣圖書之章」「御府圖書」を除く他の印記が、毛利高標の所蔵となる以前に捺されていたことの傍証となろう。

なお、「秘閣圖書之章」「御府圖書」の印記は明治時代以後に捺されたものである。

(14) 毛利高標が第八代豊後国佐伯藩主となったのは宝暦十年(一七六〇)、文武に精達し、江戸参府中は大儒を招いて講演を聴くなど修学に努めた。安永六年(一七七七)藩校「四教堂」を創立、文教を振興し、天明元年には佐伯城中に文庫を創設、その蔵書は八万巻を越へ、当時、池田定常(因幡国若桜藩主)市橋長昭(近江国西大路藩主)とともに大名の三学と称せられた。

梅木幸吉氏によれば、高標没後、文政十年にこの旧蔵書のうち千七百四十三部、二万七百五十八冊が幕府に献納され、現在千三百四十六部一万二千二百二十二冊が内閣文庫に、八十四部四千九百九冊が書陵部に所蔵されているとしている。しかし上述のように書陵部では今のところ百六十二部五千七百六十二冊が確認でき、この数は、今後の調査で更に増加するものと思われる。ところで高標の蔵書印には(一)、「佐伯矣毛利高標字培松藏書画之印」(五・五糧の方朱印)と(二)、「佐伯文庫」(縦十糧、横四・五糧の朱印)の二種があるが、内閣文庫・書陵部の所蔵本には(一)の印は全く捺されていない。また(二)の印は全て第一冊首に捺されており、その位置は書陵部所蔵本は概、内閣文庫所蔵本は常に中央下部に捺されている(国立公文書館編『内閣文庫蔵書印譜』平凡社刊『大人名辞典』梅木幸吉著「佐伯文庫の研究」)

この二種の蔵書印の使用過程について梅木幸吉氏は、大分県佐伯市蔵『後漢書補志』に捺されている(一)と(二)の印の位置関係などから、毛利高標が早から所蔵していた図書及び高標の選本によって収蔵されたもので、書誌学的に価値が高いものには(一)の印を、高標の治政中でも後期の収蔵本、あるいは高標没後に購入したと思われる図書には(二)の印を捺したことを明らかにされている(『佐伯文庫の研究』第六章第二節「佐伯文庫の蔵書印」)

(15) 太田氏は尊経閣文庫蔵『孔子家語』が加賀藩主前田綱紀の所蔵となったのは享保三年以前であることを、本書の箱蓋に記された綱紀の識語などから論証され、本書に捺されている金沢文庫印『春秋経伝集解』と同種印)はこの以前に捺されたことを明らかにされた。そしてこのことから金沢文庫印の偽印がこの時代からすでに存在した証拠でもあるとされている(上掲『書誌学月報』)

(16) 第一種から第四種までの書背から綴じ孔まではそれぞれ三耗、六耗、八耗、一・一耗である。なお、文政十一年(一八二八)から天保四年(一八三三)にかけて毛利高翰献上本のうち四千余冊の修補が終わっている(福井保著『紅葉山文庫』)本書も表紙などから判断してこの時期に修補されたと考えられる。(この時の綴じ孔が第四種で現装でもあると思われる)しかしこの時、冊立・巻立に変更がなかったことは現装各冊首にある『淡海』の印記から明らかである。

(17) また本書の綴じ孔の跡と金沢文庫印の位置から、金沢文庫印が捺されてから後の改綴の回数が推定できる。

本書の書脳つまり右双辺の外枠から書背までは三・三耗ある。金沢文庫印はこの下方に捺されているが、その位置は巻五を例にとれば、右双辺外枠と金沢文庫印の右辺外枠の間隔は、上部で二・三耗、下部で二・五耗と上部が左に傾いた状態で捺されている。

一方、G表に掲げた第一種から第四種までの綴じ孔と右双辺外枠の間隔は、第一種で三・〇耗、第二種で二・七耗、第三種で二・五耗、第四種で二・二耗である。従って金沢文庫印の右辺外枠は第三・四種の綴じ孔の中に入っている。また第二種の綴じ孔も、金沢文庫印の右辺外枠の下部との間隔は二耗と少ない。ここから第三・四種は勿論第二種の綴じ孔の装幀の時点で金沢文庫印が捺された可能性は少ない。因って金沢文庫印が捺されたのは第一種の綴じ孔の装幀の時か、それ以前であることが明らかになる。

換言すれば、金沢文庫印が捺されてから現装まで少なくとも三度の改綴が行われたと考えられる。

(18) この頭著たるものが、書陵部蔵宋版『世説新語』(函架番号五〇〇・五、上中下の三冊)に見られる。書誌を概説すると、袋綴、每半葉十行、毎行二十

字、注文双行、白口、刻者名あり、左右双辺、匡郭内、縦二十一・七耗、横十五耗、「金沢文庫」印(正印第三類第一号)および「秘閣圖書之章」の印記がある。

本書の裏にも文字移りが見られる。例へば巻中の八張後半葉第一行の「黃門侍郎」の「門侍」の二文字が、九張前半葉十行裏に「門侍」と移り残る。殊に同巻二十一張後半葉第一行の「嫁文度」の三文字においては、「家又変」の部分が破れ、紙片となって二十二張前半葉十行の裏に残っている。これなどは、正に粘葉装から袋綴に改装される際に不注意に剥がされたことを如実に示している。なお、本書に捺されている金沢文庫印が、同じ張の対象の位置に鏡移りとなっていることから、本書の場合も『太平御覧』と同様、粘葉装の時点で金沢文庫印が捺されたことが分かる。

(19) 『書道藝術』第八卷(中央公論社)所載における祝氏の印記の中には本書に捺されている印記と同じものはない。

(20) 阿部隆一氏は前掲『日本国見在宋元版本志経部』において本書は「古く我が国に将来された金沢文庫旧蔵本で(中略)巻九の二十一丁表(経十七年)までには、室町期の筆で、朱点朱引朱ヲット点(明経点)、墨筆の返点送仮名が詳細に加点され」とされ「此等書入は清家点本による移写と思われる」と述べられている。

(21) 静嘉堂文庫蔵、十五冊と、この僚巻と思われる北京図書館蔵の巻二十二の零本、そして書陵部蔵本の三本(『日本国見在宋元版本志経部』所載)